令 和 7 年 度　学 校 総 合 評 価

6　今年度の重点目標に対する総合評価

（1）学習活動「覚えた手話や音声言語を使って豊かにやりとりしようとする児童の育成」

主たるコミュニケーション手段が異なり、会話が一方的になりがちな児童たちの会話は、教師が介入してつなげることが多かったため、児童全員で行う自立活動の時間を毎週設定し、共通して使用できる手話単語を増やしたり、学習した単語を使った短い会話のやりとりを練習したりする活動に取り組んだ。また、授業だけでなく、手話プリントを宿題にしたり、各自のタブレット端末に教師のやりとりの見本を入れ、自宅に持ち帰って家族と一緒に練習したりできるようにした。

継続した取組により、友達の話を聞いた後にあいづちを打ったり、体調を気遣う言葉を伝えたりするなどの様子が日常的に見られるようになり、児童同士の温かい雰囲気が生まれた。

（2）進路支援「インターンシップの評価表と日誌を活用した生徒の職業意識向上のための効果的な支援の充実」

高等部の３年間で計８回行うインターンシップで事業所担当者に記入していただく評価表や、生徒が記入する実習日誌等を基に、高等部所属教員全員で進路検討会を実施し、個々の生徒の成果と課題を共有した上で、課題を基に学校生活全般における指導方針や支援方法について検討した。また、進路検討会の内容を受け、専門教科の授業担当者で検討会を実施し、個々の生徒の作業学習のねらいや具体的な指導内容と方法を共通理解した。

検討会の場を設定したことで、「目指す生徒像」や指導方針の意思統一をしただけでなく、生徒一人一人の就労適性についても協議し、次のインターンシップ先の選定につなげることができた。

7　次年度へ向けての課題と方策

（1）手話学習を継続し、より多くの手話表現を身に付け、共通して楽しめる経験を保障しながら児童同士のやりとり（話題）がさらに増えるよう支援していく。将来的に多様な人と関わる機会が増えることを踏まえ、話し言葉を基盤としながら、書き言葉の力を高めていく必要がある。児童が苦手とする助詞の使い方や文による表現の指導を行ったり、タブレット端末を使用した筆談を取り入れたりしていきたい。

（2）インターンシップの評価表は、事後学習や進路面談等で自己理解を促すための支援ツールとして活用している。生徒の評価である一方、教員にとっては自分たちの働きかけの在り方を確認、評価するツールとしても活用することができる。個々の生徒の社会自立に向けた目標を明確にし、指導方針を共通理解した上で指導するとともに、生徒一人一人に具体的にどのような働きかけをしたのかを確認する場を設け、支援方法の成果について検証していく必要がある。

８　今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和７年度　　富山県立高岡聴覚総合支援学校アクションプラン　　－１－		
重点項目	学習活動　－小学部－	
重点課題	覚えた手話や音声言語を使って豊かにやりとりしようとする児童の育成	
現　　状	・児童数が少なく、一人学級が増えたことにより、児童同士が関わってやりとりすることが減っている。簡単な身振りを使う姿も見られるが、会話が一方的な児童が多く、教師が介入して会話をつなげることが多い。 ・聴覚を活用し、音声言語でのやりとりが中心の児童、大いに手話を手掛かりにしている児童と主たるコミュニケーション手段が様々である。	
達成目標	・全児童で行う自立活動の時間を設定し、新しい手話や音声言語を学んだり、復習したりする時間を設定する。	
	月１回程度	
方　　策	・学校生活で日常的に行うやりとりをテーマにした今月の手話を決める。 ・手話動画やイラストなどを使って、楽しく手話や音声言語を学べるようにする。 ・新しい手話言語や音声言語を覚えたら、テーマ毎の手話プリントにシールを貼ったり、日付を書いたりし、視覚的に自分自身のがんばりが見えるようにする。	
達 成 度	１、２学期中に全１７回実施　／各テーマにつき２～３回実施	
具体的な取組状況	・児童全員で行う自立活動の時間を毎週火曜日に設定し、共通して使用できる手話単語を増やすよう「友達や教師の名前」「教科」「体調」「日付・誕生日」をテーマとして取り上げた。授業では、学習した単語を使った短い会話のやりとりをする活動を取り入れ、①教師同士の見本を見る、②児童と教師が練習する、③児童同士で練習するなどの流れで行った。 ・手話学習の前に、「指はピン、動きはピタッ！」を合い言葉に、より相手に伝わりやすい表現ができるよう毎回確認した。 ・手話単語や会話のパターンの動画を作成し、授業だけでなく、各自のタブレット端末に入れ、自宅に持ち帰って家族と一緒に練習できるようにした。動画と同様の内容の手話プリントを準備し、手話の練習を宿題にした。	
評　　価	A	１学期当初は、児童同士では会話が途切れてしまうことが多かったが、継続した取組により、友達の話を聞いた後に、「へぇ」「（私も）同じ」とあいづちを打ったり、体調を聞いて「お大事に」と言葉と手話ですぐに返事を返したりする場面が日常的に見られるようになった。短い返事であっても、笑顔が増え、児童同士の温かい雰囲気が生まれている。
学校関係者の意見	・児童だけでなく、家族と一緒に練習できるようにした取組は、家族の手話スキルの向上にもつながり、大変意義のある取組である。 ・将来的に多様な人と関わる機会が増えることを踏まえると、自分の思いを適切に伝え、相手の思いを理解するためには、文章で表現する力を育むことは重要である。児童のタブレット端末を使用して、書いて伝え合うコミュニケーション方法（筆談）を取り入れてみてはどうか。	
次年度に向けての課　　題	・今後も手話学習を継続し、より多くの手話表現を身に付け、共通して楽しめる経験を保障しながら児童同士のやりとり（話題）がさらに増えるよう支援していく必要がある。 ・児童たちは、学年が上がるにつれ、話し言葉を基盤としながら、書き言葉の力を高めていかなければならない。現状は、文を書く際に助詞が抜け、文を書くこと自体が苦手な児童が多い。話し言葉での理解や表現を生かしつつ、書き言葉へと円滑につなげていく指導の充実も今後の課題である。	

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和７年度　　富山県立高岡聴覚総合支援学校アクションプラン　　－２－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">進路支援</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">インターンシップの評価表と日誌を活用した生徒の職業意識向上のための効果的な支援の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・高等部では、卒業後の一般企業等への就労を目指し、１年次は年間２回、２、３年次は年間３回のインターンシップを実施しており、体験中の様子について事業所担当者に評価表を記入してもらっている。インターンシップ後は、個々に評価表の項目をレーダーチャート化し、事後学習や進路面談等で自己理解を促すための支援ツールとして活用している。
・教員間では、評価表、生徒が記入した日誌、巡回指導記録を回覧することで、個々の生徒の課題や成果について共通理解を図っているが、支援内容については担任や授業担当者に任せている。
・生徒が望ましい勤労観や職業観を身に付けたり、自己理解し、社会自立に向けた目標を明確にしたりできるよう、指導方針や支援方法について教員間で協議、検討し、共通理解を図った上で支援を行う必要がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td colspan="2">評価表や日誌等を基に、個々の生徒の成果と課題を教員間で共有し、指導方針や支援方法について検討する場を設定する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">年４回</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・インターンシップ終了後、評価表と日誌を基に、個々の生徒の成果と課題を明らかにする。また、課題をもとに学校生活全般における指導方針や支援方法について協議、検討し、高等部所属教員全員で共通理解を図る。
・就労生活に必要な技能や態度を学習する専門教科（家政、福祉、流通・サービス）における指導方針や支援方法について検討し、授業担当者が個々の生徒のねらいや指導方針を共通理解する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td colspan="2">Ａ（年４回）</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">【進路検討会（第１回)】（７月実施）
・６月のインターンシップ後、実習の様子や評価表に基づき、高等部教員で進路検討会を実施した。個々の生徒の成果と課題を共有し、指導方針および支援方法の共通理解を図り、一貫した指導を行った。
【進路検討会（第２回)】（１２月実施）
・６月と同様に１１月のインターンシップ後に進路検討会を実施した。３年生については卒業後の生活を見据えた指導方針の再確認を行い、１、２年生については指導方針や支援方法の共有に加え、生徒の変容（成長）や就労先への適性についても協議し、次年度の指導につながる検討を行った。
【作業検討会（授業への反映)】（７月、１２月実施）
・進路検討会の内容を受け、専門教科担当者で作業検討会を実施した。清掃用具等の扱いが不十分な生徒には、清掃場所が変わってもできる方法を考えたり、「はい」と返事をしても理解ができていない生徒には、分かったことを話させる機会をもち、分からないことは質問するよう指導したりするなど、個々の生徒のねらいや指導内容を具体的に共通理解して取り組むことにした。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>Ａ</td><td>共通理解の場を設けたことにより、高等部全教員が「目指す生徒像」や指導目標を共有し、統一した方針で支援にあたることができた。 複数の視点から生徒の様子を捉えることで特性や目標が明確になり、生徒一人一人のニーズに応じたサポート体制を築くことができた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="2">・顔を合わせながらの意見交換は、一人一人の生徒を多角的な視点で捉えることができると同時に、教員の考え方や思いを知る機会にもなる。
・チームで生徒を支える体制づくりは大切なことである。</td></tr>
<tr><td>次年度に向けての課　　題</td><td colspan="2">・インターンシップの評価表は生徒の評価ではあるが、教員にとっては自分たちの働きかけがどうだったのかを確認するツールとしても活用していく。
・それぞれの授業で、生徒一人一人に具体的にどのような働きかけをしたのかを確認する場を設けたり、どのような支援をしたのかが分かる記録媒体の工夫をしたりして、支援方法の成果について検証していく必要がある。</td></tr>
</table>